特集◆第6回 雪舟の里 総社 墨彩画公募展

光と影を巧みに表現 雪舟大賞は 山本真一さんの「黄昏」

雪舟大賞
「黄昏（たそがれ）」

平山郁夫賞
（審査員長賞）
「働く人」
倪玫玲さん（京都市）

6回目となる「雪舟の里 総社墨彩画公募展」。全国から371点の力作が寄せられた。審査は6月25日に行われ、雪舟大賞、平山郁夫賞（審査員長賞）、特選3点、奨励賞5点、入選55点が決定した。

特　選

「霹靂（へきれき）」
坂元 洋介さん（千葉県松戸市）

特　選

「凍（こお）れる池」
小田　賢さん（兵庫県川西市）

特　選

「春風届（しゅんぷうとど）く」
藤田 哲也さん（愛知県長久木町）

第6回 雪舟の里 総社 墨彩画公募展　雪舟大賞受賞者
山本真一さん（岐阜県養老町）

雪舟大賞受賞の知らせを聞いて、しばらくは信じられませんでしたが、一つの結果が出て喜びを感じています。この絵の題材は、長野県南木曽町で毎年11月に行われている文化文政まつりで出番を待つ素朴で無邪気な子どもや馬、荷車です。生命感を出せる絵にしたく、人間の営みである「礼」を出せたかなと思います。最初は色もありましたが、最終的に白と黒の絵になりました。白の空間がきれいなら、黒もきれいに見えるので、空間処理に気を配りました。

＜プロフィール＞　昭和42年、愛知県名古屋市生。日本美術院院友。臥龍桜日本画大賞展奨励賞（平成6年）、日本美術院展初入選（平成6年。以後毎年入選）、てんびんの里日本画コンクール優秀賞（平成17年）などの入賞歴をもつ。

審査員長	平山 郁夫（日本美術院理事長）
審査員	上村 淳之（日本芸術院会員）
	神野　力（元ノートルダム清心女子大学教授）
	竹内 浩一（京都市立芸術大学教授）
	福井 爽人（東京芸術大学名誉教授）
	牧　進（日本画家）
	守安　收（岡山県立美術館学芸課長）

審査講評から

「甲乙つけがたし」。審査員長を務めた平山郁夫さんは審査のむずかしさをこう表現した。このため、「入選」の点数が当初の45点から55点に急遽（きゅう）変更になった。上村淳之さんも「めだって優れたものがない。それは、全体のレベルがそろってきたことを意味している。今回と過去の雪舟大賞を見比べても遜色（そんしょく）はない」と話す。出品者の技術的な水準が高くなったことを審査員は異口同音に口にした。

墨彩画は水墨画の枠にとらわれず、自由な発想や技法、幅広い色使いで描かれる絵画だ。「墨彩画の意味を各人がそれぞれの意味合いで、少しずつつかんできている」とは福井爽人さん。牧進さんも「一つの文化が育っている実感がする」と話す。レベルが上がった要因の一つとして、墨彩画への理解が深まっていることもあるのかもしれない。

雪舟大賞や平山郁夫賞がそうであるように、「今回は人物を扱った絵が意外に多い」と神野力さん（井尻野）は指摘する。今までにないこの傾向も今回の特徴だといえる。竹内浩一さんは「生活のなかで得る感情から生まれてくるイメージをいかに絵に表現しているかがポイント」と言う。皆さんも、このような視点から入選作品を鑑賞してみてほしい。

この公募展は若手画家の登竜門ともいわれている。現に20歳代の入賞者は21人にものぼる。30歳代も含めれば半数を占める。審査員も作品から若さを感じていた。そして、「今後も伸び伸び描いてほしい」とエールを送る。

画聖・雪舟を顕彰して始まったこの公募展。今や墨彩画は総社のブランドとして定着しつつある。そして、底辺の広がりを期待しながら、墨彩画を大成させる第二の雪舟さんが現れることを願う公募展でもある。

送られてきた作品

作品受付

審査風景

雪舟没後５００年顕彰事業
第6回雪舟の里総社墨彩画公募入選作品展2006

●総社会場　8月26日(土)から9月3日(日)まで／いずれも午前9時30分から午後5時30分まで／サンロード吉備路
第6回雪舟の里総社墨彩画公募展入選作品65点を展示。8月26日(土)には、「上村淳之ギャラリートーク」と題し、審査員で日本芸術院会員の上村淳之さんによる作品解説が午前10時15分から行われる
●倉敷会場　9月6日(水)から10月8日(日)まで（月曜日休館）／いずれも午前9時から午後5時まで／加計美術館
●岡山会場　10月11日(水)から15日(日)まで／いずれも午前10時から午後6時まで／天満屋岡山店
●問い合わせ　総社市文化振興財団（☎㊷3491　総合文化センター内）